

人権作文

家族や身近な人との関係を見つめ直し、人権や差別について話し合う機会を持ちましょう。

私の家族

阿蘇清峰高校 三年

藤川 美穂

昨年までの自分は言いたいこともなかまに言えませんでした。うまく伝わらなかつたら：などと自分の言葉を飲みこんでいました。

しかし、昨年の子ども集会で私は自分の変わり目となる勇気をもらいました。昨年の子ども集会で思い出すのは集会最後の高校生の報告です。

たくさんの人の前で自分の家族のことを泣きながら報告され、私はその報告を高校生のなかまと一緒に立ちながら応援をしました。私は心の中で頑張れと言っていました。

このときの会場が一つになった感覚は今でも忘れられません。この体験からなかまがいれば、何事も乗り

越えられることを学びました。

小学校の時の私は、小一から小四の間、女の子のグループを淡々と回っていました。私は周りからはいつも元気よさそうに見えなければいけません。自分自身が人を信じてきませんでした。それと、友達とケンをしたらややこしくなるのが嫌だと思い表面的なつきあいをしていました。

私は、母に相談しようとも考えましたが、相談出来ませんでした。母は、私の悩み事を自分の事のように考えてくれるので、私のせいで雰囲気や表情が暗くなることを心配して言えませんでした。

私は、五年生のとき友達に初めて心を開こうと思いました。その人には何でも話したいと思っていました。しかし、友達から裏切られてしまいました。

信じていた友達は、私のことをキモイやあいつはブスとクラスの子に言っていました。私は、それを聞いた瞬間、ショックを受け、私は何か悪いことをした？と疑問が出てきました。嫌な事をしたなら言つてよ、と思いました。その思いを伝えないうちに、悪口を言った子は転校をしてしまい、話が出来なまま終

わってしまいました。今思うと、その時、話し合いをすれば嫌な気持ちにならなかつたのだろう、と思います。これが学習会に行く前の私です。

私が学習会に通い始めたのは、中学校二年生です。最初は、「学校の勉強ができるから学習会に行かない？」

と、親友に言われたので、勉強ができるならいいかなと思いい、行くことに決めました。私は、教科学習ができればよかつたわけで、学習会で行われている人権学習には関心がありませんでした。特に小・中・高校の人権学習では、クラスでこの学習をしていると、皆静まります。それに、この学習に興味が無さそうな人もいます。そんなみんなの姿をみると、人権学習はやらなくていいんだと思っていました。そして私は、皆の雰囲気にもまれてしまい、自身、差別に負けていました。ある時、学習会で私が教科学習をしていると、担当の先生が、「人権学習をやるぞ。」

と、言われました。先生が人権学習を行うために準備をして来られたのだろうと思いい、まあいいか、という気持ちで先生の話を聞いていました。その話は石川一雄さんのことでした。私は、その話を聞き、変わる

ことが出来、私自身、人を見た目で判断しなくなりました。そして、人が悩んでいる所を見過ごしてはいけないと思うようになりました。そう思うようになったのは『なかま』の姿からです。私のなかまは学校に居る時と学習会に居る時は全然違います。学習会に居る時は皆、笑顔です。それに、学習会に通っていると学習会のなかまは私の嫌なことを聞いてくれます。返しの言葉も私に聞かれます。私にとって、学習会の場合は自分が素直になれる所です。前の自分だったら素直になれていません。そして学習会にも行っていないと思いいます。私は、今居るなかまを大切にしたいと思いいます。だから、私は、言いたい事があるなら言つていきたいし、なかまに言われたことも大切にしていきたいです。

私はそんななかまからのアドバイスで、今までもと聞きたくても恐ろしくて聞けず、確かめてこなかつたお父さんのことを、母に聞きまし

た。私の家族は母と姉と私の三人家族です。そして、私には、お父さんがいません。父と母は、私が母のお腹の中にいた時に離婚をしたそうです。ですから、私は父との思い出がありません。最初は母に父のことが聞けませんでした。なぜなら、母を

傷つけてしまいそうだし自分自身も傷つくのが怖かったからです。

でも、全国の高校生のかなかまが部落差別に負けず、真剣に自分と向き合っている姿を見て、私も自分としっかり向き合いたいと思い、母に尋ねました。

「お母さんって、お父さんが居ないのになんで産もうって思った？」と、聞きました。それまでの表情が変わり、母は真面目な顔をして、「たとえ、離婚しても授かった命だから大切にしたい。」

と、言いました。私は、その言葉を聞いた瞬間、心の中で嬉しい涙が出ていました。

私に命をくれたのは父と母です。私は母だけではなく父からもらった命も無駄にはしたくはありませんでした。だから私は、父のことを聞きました。

「お母さん、私のお父さんってどんな人？」

と、聞きました。母は

「性格は、お酒を飲むと口調が荒くなっていたよ。あと、仕事はトラックの運転手だったよ。」

と、普通に言っていました。そして私は、今、お父さんが何をしているか気になったので、

「今、お父さんって何してるんだろうね。」

と、軽く聞きました。

母は、

「ばあちゃんから、お父さんが死んだって聞いたよ。」

と言いました。私はそれを聞いた瞬間ショックでした。そして一番

に、

「私には、お父さんは居ないんだ。」

と思ひ、後の言葉が出ませんでした。

私は最初、父が死んだことを受け入れることが出来ませんでした。なぜなら、一度でもいいから会いたいと思っていた父が、この世に居ないからです。私は啞然としていました。そんな私に、母は、父が再婚してからの生活についても話をしてくれました。私は、母と話をしていくことで父が亡くなっていることを少しずつ受け入れられるようになり

ました。確かめた真実はつらかったけど、今は父のことが聞けてよかったと思ひます。なぜなら、父はどんな性格をしていたかとか、どんな仕事をしていたかなども聞くことができ



たからです。そして、何より母との距離がずっと縮まったからです。

これからの私。私には幼い頃からの夢があります。それは、立派な介護士になることです。介護士を目指そうと思つた理由は、人の役に立ちたいという思いもありましたが、自分がやりたい事を精一杯やり、父がくれた命を大事にしていきたいと思つたからです。そして、何よりも今まで育ててくれた母にも親孝行をしたいと思つています。

親孝行をしたいと思つている理由は、母の持病にあります。頭の病気です。母は薬を飲まないといふとしてしまう病気です。毎日薬を飲んでいきます。この病気を書くことは、母に反対されていました。母は、

「なんで私のことを書くの？」

と、ちょっと困つた顔で言いました。私は、

「お母さんの病気のことから自分の夢を書きたいからだよ。」

と、言いました。それでも母は「ダメ。」

と言っていました。私は

「わかつた。一回作文書くからそれを読んだらいいでしょ？」

と、言つたら、母は

「わかつた。」

と、言つてくれました。私は一回書

いた作文を見せました。母は、「良く書けるから発表していいよ。」

と、言つてくれました。母は作文を読み終わり、

「この作文が集会に来ている子に役に立つならいいね。」

と、笑顔で言つてくれました。私は嬉しかったです。私は、父が居ない分、母に迷惑をかけてきたと思ひます。私は、父のことが聞けて、私自身も夢を実現させたいという気持ち

がより強くなり、本当によかつたと思ひます。

そして、なかまを信じて自分と向き合うことが、差別をなくす第一歩になるということを学(まな)びました。

お母さんの本音も聞けたし私はよかつたよ。私は、これからもお父さんのことをいっぱい聞けね。私はこれから就職して大変だと思ひます。また、職場でも多くの壁にぶつかる

かもしれませぬ。その時は、素直に言えない時もあるかもしれないけど、

言えるよう努力をします。そして、一つずつお父さんが大好きになれるように私も努力をします。そして、もう一つ、私はお母さんの子どもで良かった。

私を産んでくれてありがとう。お母さん大好きです。